

稲賀繁美

〔国際日本文化研究センター総合研究大学院大学助教授 比較文化〕

ドイツ文化状況瞥見



文化振興と大学の役割。新世紀への取り組みのご参考まで、ドイツ瞥見の印象を述べたい。

昨年五月、十五年振で、再統一後のベルリンを初めて訪ねた。かつて毎週のように通った西側、ダーレムはグルーネヴァルトの森に囲まれた、大美術館・博物館に足を伸ばした。だが、当時威容を誇っていた絵画館、銅版画館は、ティアガルテン南に新築の文化フォーラムへと移転され、すでに跡形もない。民族学博物館と東洋美術館だけが、物寂しく取り残されている。あたかも西洋美術以外は、新文化政策から置き去りにされたも同然の扱いだ。おまけに民族学博物館の応接広間は、殺伐として荒れ放題。またインド美術から、ペゼクリクの千仏洞壁画復元(奈良、京都を爆撃から救ったとの逸話を残すウォーナ)がこの壁画「略奪」に関与している)、さらに中国・日本に至る豊富な収集を誇る東洋美術館は、もつか改装中にて閉鎖。西ベルリンの文化の中心として活況を呈していた、往時のダーレムの繁栄は、もはや偲ぶ術もない。昔の栄華いま何処。栄枯盛衰の様には、しばし啞然として言葉がない。

再統一後のベルリンの美術館・博物館再編成と、その孕む幾多の問題については、ベルリン在住の桑原節子さんに、詳細で要領のよい紹介記事がある(『アート・フォーラム21』第

三号、二〇〇〇年秋）。シュプレー川の中洲に位置し、西暦二千年にユネスコの世界文化遺産に指定された、旧東ベルリンの博物館島には、名物のペルガモン美術館に並んで、現在改修中のボーデ美術館に、古代・地中海文化圏の美術が集中される予定。文化フォーラムに移転したばかりの西洋絵画も、再度、博物館島へと移動される予定となり、賛否両論の議論を呼んだ。一九七〇年代に破壊され、東独様式のアスベスト貼り「共和国宮殿」へと変貌した、旧ベルリン市宮殿の再建計画も日程に昇っているが、そこにダーレムの東洋美術館や民族博物館をも吸収すべきとする、文化財団総裁レーマンの提案は、今のところ予算の裏付けもない机上の空論。実現にはなお最低十五年は掛かるだろう、というのが桑原さんの予想である。

秋からは由緒ある大学都市、ハイデルベルクで教鞭を取った。ドイツ唯一の大学付属東洋美術研究所からの招きだが、中国学・日本学研究所の面々とも密接な交流を持てた。だがこちらも州政府の方針でアジア学関係施設の整理再統合が予定されており、これまでの蓄積を将来の発展に生かせるか否か、今が正念場といってよい。もとより東洋美術史学は西洋美術史学とは学問的な接点が乏しい。日本学関係では、文学・政治それぞれ一講座相当の協に、美術史学が一講座相当という配分だが、両者の学生同士の交流も活発とはいえない。学部段階の語学習得は共通大講座にして、修士以上で専攻の研究者養成に焦点を絞るのが大方針の様子だが、その設置場所がどこになるかは、州政府の意向次第で、目下なお不透明という。

これとは対照的なのが、ザールブリュッケン大学の「文化間コミュニケーション」博士課程の場合だろう。まだ歴史の浅いコースながら、魅力的なプログラムに引かれて、ロシアやアラブ圏など各地から、留学生を含めて多分野の学生が集まってくる。母体となる比較文学担当者が、ロマンス語系の専門家とゲルマニストとの交流の場を確保し、専門蛸壺とは無縁の脱領域を目指していることも幸いした。フランス国境にほど近いというお土地柄、思わぬ多言語状況、複数文化混在を格好の下地とした、新たな大学教育・研究の模索がここにある。

大きな文化的地殻変動と長期展望の動揺、歴史ある老舗大学の逡巡、そして異分野交流の可能性、留学生による知の活性化。翻って明日の京都は何を目指そうとしているのだろうか。



京都芸術劇場柿落記念出版

創造する伝統

二〇〇一年五月二九日 初版第一刷発行

定価 一八〇〇円(税込)

編者 京都造形芸術大学

(財)日本文化芸術財団

発行人 徳山詳直

編集人 芳賀 徹

発行 京都造形芸術大学芸術文化情報センター

〒六〇六―八二七一

京都市左京区北白川瓜生山二―一六

TEL 〇七五(七九二)九二二三

FAX 〇七五(七九二)九二二七

© 京都造形芸術大学 2001 Printed in Japan